

---

# 雨は優しくも辛い記憶を呼び覚ます

零・ZA・音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨は優しくも辛い記憶を呼び覚ます

### 【著者名】

Z6567A

### 【作者名】

零・ZA・音

### 【あらすじ】

子もどの頃、雨の中で体験した出来事。誰も信じてくれなかつた事なのに、あの人だけは信じてくれた。今でも思い出すあの日の出来事は、今日と同じよう日に起つた。

(前書き)

テーマ小説です。「雨小説」で検索すると他の方の作品も読めます。是非、読んでみてください。

子供の頃、俺はとても不思議な経験をしたんだ。

それを大人に話しても、誰も信じてはくれなかつた。俺は眞面目に話しているのに、大人はただ笑つて俺を見ていた。

何故、誰も信じてはくれないんだ。本当の事なのに…俺は嘘なんてついてないのに…。

でも、一人だけ俺のいう事を信じてくれた人がいた。その人はとても優しくて俺の大好きな人だつた。

今思えば、それは幼い恋心とでも言つのかも知れない。だけど、当時の俺はそれすら分からなかつた。

ただ、俺の言う事を優しい表情で聞いて…時々驚いたり、笑つたりしてくれれる事の方が嬉しかつた。

優しかつたあの人は、今でも俺の中にいる。そう、あの日

あの出来事があつたのも…今日みたいな雨の日だつた。

「しつかし、よく降る雨だ…」

窓の外をぼんやりと眺めている俺の後ろから、聞き慣れた声が耳に届いてきた。

振り返らなくて分かる声の主を無視しようと思つたが、窓に映る奴の顔がそれをさせてくれないみたいだ。

何故、俺の後ろで百面相をしているのか、小一時間程問い合わせみたい。

「何をしてるんだ…お前は」

「んつ？…気にするな、フォーレン」

「誰だ？…その名前は」

「お前だ… フォーレン」

窓越しに見える馬鹿が俺を指差しているが分かる。頭がいかれたか？ 雨ばかり降るものだから頭の中にカビでも生えたか。可哀相に…若いのに、後々苦労するだらう。ひつ。

「頭は正常だぞ… 一応な。だから、フォーレンはお前だろ 人」

「直人って呼んでんじゃねえかよ… アホかお前は」

「おうつ… しまった。 笹原修吾、一世一代の大失態つ… ならば、この場で切腹を」

「だから、うつとうつしいんだよつ！ 小芝居は、どこか他でやれよついい加減、アホを相手するのも疲れたが、後ろで騒がれたのでは堪つたものではない。

勢いよく振り返り、そのカビの生えた頭でも殴つてやるうつと思つたが、このアホにそれをする

が、また長くなるのでやめておひつ。

「酷いではないか… 親友に向かつてその暴言。今なら、もれなく裁判所がついてくるぞ」

「意味が分からん… 本当に、頭にカビでも生えているのか？ それより何の用だよ…」

呆れて喋るのも辛い。この馬鹿は、このうつとうつで天氣でも、そのテンションは変わりないようだ。

まあ、それがいいところであるんだが…。だが、今の俺にはついていけないテンションだ。

「いや、もう学校が終わった訳だし帰ろひつせつ… つと思つてな

「気色悪いスマイルを振りまくな

無意味に歯を剥き出したして笑つて いる修吾を軽く小突いて俺は席を立つた。

座りっぱなしだったので、腰が微妙に痛い。身体を廻してコリを取り、鞄を手に取った。

「せつほう、今日はやけに素直じゃないか…それでは帰るかえ」「そのテンションについていけないだけだ…」

前を歩き出した修吾は、アホみたいな声で歌いだした。なんでこんなにテンションが高いんだ…こいつは。

「そんな事言つな、心友よ。俺とお前の仲ではないか

「気色悪い事を言つなつ…何が心友だ」

「心の友と書いて心友。かつこいではないかあ…」

宙に指で何やら書いている修吾。その不気味な笑顔をどひにかしてほしいものだ。

「分かつたよ…だから、その無意味なテンションを地獄の底まで下げる」

「それは、俺に死んでここにこと言つのかつ！マイブリザート！」

「だからそれががうつとひじこいつて言つんだよつ…」

すがり付いて来る修吾を叩いて引き剥がすが、またくつ付いてくる。

この蒸し暑い中、そんな事をされたら汗だくになつてしまつではないか。こんな事ならさつあと帰つていればよかっただ。

「それにしても、さつきは何難しい顔してたんだ？直入」

いきなり真剣な表情を作り、俺を見つめている修吾。さつきまどの馬鹿面はどこにいった？

これでも、俺との付き合つては長いこいつの事だ あの一瞬で俺の変化に気づいた訳だな。

さすがと言つべきか…何と言つか、さつきた人の変化だけには敏感な奴なんだ、こいつは。

少しは、自分のテンションにも敏感になつてほしいけどな。周りはついていけない事を実感して欲しいものだ。

「いや…昔の事を思い出していた。あの口も雨が降つてたなと思つて…」

「んつ……あの龍の事か。未だに俺は信じられないけどな。死者の魂を空に運ぶのが役目なんだろう」 龍つて……」

修吾は、しきりに唸り声を上げて考えていた。だけど、考えたつて出てくる答えなんてない。

俺が子供の頃に経験した事 それは不思議な女の子と龍との出会い。

龍は空に住むと…そして、死んだ者の魂を天国へと運ぶのが役目だと俺の出会った龍は言っていた。

「そりへじこな…俺の会った龍はどんな役目なのかは知らないけどな」

「うへん…やつぱり、信じられん

「別にいいさ…誰も信じてくれなくとも…」

半ば自嘲気味に言つ俺に修吾は

「いやつ…俺は信じるぞっ！お前の事を！」

「修吾？…今、信じなって言つたのはどこのどこのだ…」

「俺はお前の事を信じる訳で お前の言つている事を信じるとは言つてない」

また、意味の分からぬ自論を唱え始めた修吾。言いたい事は分かるんだけど、こいつの場合は特殊だからな。

そう言えば子供の頃 修吾だけだったな…俺の友達は。

俺の事を「嘘つき」呼ばわりする奴等に泣かされていたら、近づいてきて本気で奴等に怒つてくれた…。

こいつ自身は覚えてないとシラを切つていたが、俺はシッカリと覚えているんだ…すごく嬉しかった事を…。

「まあそんな事はいいから、帰ろ」

俺の背中を思いつきり叩いて歩き出した修吾。あいつなりの励まし方なんだが、結構痛いだぞ。

ジンジンとする背中を擦りながら、修吾の後を追つよつとして教室

を出て行つた。

外は、少し雨が小降りになつたのか静かな雨音が辺りに響いていた。独特的の雨の匂い…この匂いを嗅ぐと思い出す子供の頃の記憶。あれは本当にあつた事なのか…。

今となつては現実なのか…夢だったのか分からぬ。それでも、この記憶が消えないのはあの人のがいたからだ。

「俺は…あの人を」

呟いた声は雨の音にかき消されていく。痛い…あの人との事を思い出すと俺の心は疼き出す。

俺のせいであの人は…。

「どうした? 直人」

「んつ…いや、なんでもない」

「そうか、なら帰るべえ」

「ああ…」

傘を差して歩き出した修吾の後ろ姿をぼんやりと眺めていたが、俺も傘立てに差してある傘を抜いて開いた。

「遅いぞおー、直人」

「悪い…」

振り返り俺を睨んでいる修吾は何故か傘を振つて暴れていた。あれでは濡れるだけなのだが…。

それすら気にしてない様子の修吾は、一向にやめる気配がない。

「お前、風邪引くぞ」

「んつ? 大丈夫だ。俺は風邪なんか引かないぞ」

何故か笑顔の修吾は俺にピースをしている。こいつはアレだ…一言で言つと

「そりだな……何とかは風邪引かないって言つしな」

「どういう意味だ……直人」

「気にするな」

まだ何か言いたそうな修吾を尻目に俺はゆっくりと歩き出した。それから、暫くは一人で馬鹿な事を話しながら歩いていたが、急に修吾が足を止めた。

「じゃ、俺はちょっと用があるから、ここでなつ」

「んつ……ああ、じゃあな、修吾」

「おうつ！風邪引くなよ、直人」

「それは俺の台詞だ」

軽く手を上げて歩いて行く修吾を見送り、俺も歩き出す。家まではもう少しの場所。この変では一番大きな川を眺めながら考えていた。そういえばここだつたな…。

俺がアレを見たのは……今でも本当だつたのか、信じられない。そんな事を考えながら河川敷を歩いていると突然、強烈な耳鳴りがし出した。

「つ……なんだつ！」

あまりにも強い耳鳴りに立つていても辛くなり、その場につづくまる様にして座り込んだ。

しかしながら？この頭の中まで響くような耳鳴りは…。目を開いているのも辛いが、それでもなんとか辺りに

目をやると……俺は固まっていた。そこには川には不釣合いなものがいたからだ。

「なつ！なん」

そう言いかけて俺は気づいた。知つていて……俺はアレを知つていて。子供の頃見た事がある……あのままの姿。

「まさか…」

ただ一言、そう言つと俺は吸い寄せられるように川辺へと近づいて

いつた。いつの間にか耳鳴りは収まっていた。

目の前に広がる光景は、現実を逸脱していてファンタジーの世界にでも迷い込んだみたいだ。

白く霞む周りの景色…どこかおかしい感じがするが、それも気にならなくなっていた。

ただ、目の前にいる

それが俺を見つめていた。

『久しぶりだな…人の子よ

頭の中に直接響いてくる声は昔聞いたままの声だ。

『お前には色々と世話になつた…』

優しい瞳で俺を見ている。懐かしさが俺の身体を包んでいく。声だけでなく、その姿もあの時のままだ。

現実には在り得ない存在…架空の生物としてゲームの世界などでは有名なものが俺の目の前にいる。

龍。

一言で言えば簡単だ。でも、その存在は現実には確認されてない。だから子供の頃、俺の話を誰も信じてくれなかつた。ただ一人を除いては…。

『我等が姫を助けた小さき人の子も…随分と大きくなつたものだ』

懐かしそうに呟く龍は俺を見つめていた。何故か居心地のよい感じ

…俺の中にある記憶が次々と蘇つてくる。

あの雨の日の出来事

『いろいろの世界に迷い込んだ姫を、助けていただいて感謝している』

そう言っていたのは、この龍だ。俺はこの川で一人の女の子を助けた…雨に濡れて寒そうに震えていた女の子。

その子を見た時、どうしてか身体が勝手に動き助けていた。最初は俺を見て怯えていた女の子。

話している言葉も俺には分からぬものだった。俺は始めてみる女の子を外人だと思つてたつけな。

それから、家に連れて帰つたけど誰もいなくて…その時、ちょうど家に来たのが隣のお姉さんだつた。

俺達を見て驚いてたな…一人共びしょ濡れなんで、慌ててタオルやら服を用意してくれたんだ。

それから少しして、女の子は急にいなくなつていた。俺は必死で探し廻つて…そしてこの龍に出会つたんだ。

『あの時は世話になつたな…人の子よ。姫は今でも、お前の事を気にしているぞ』

今更それを言われてもどうしようもないんだが、今まで嫌な事まで思い出してしまつた。

女の子を探し回つていた俺は、またこの川に戻つてきていた。もしかしたら…そんな気がしていただだ。

案の定、女の子は俺が見つけた場所にいた。ただ、川を見つめてじつと佇んでいた。

傘も差さずにまた濡れて…そう俺は思いながら女の子に近づいて行つていた次の瞬間

いきなり、女の子が川に飛び込んだんだ。一瞬、呆気に取られた俺だけど、この雨で水が増えていたのは見た目でも分かつた。何考えているんだ…そう思つて走り出しあつた時、川から突然水飛沫を上げて現れたのが

この龍だつた。龍は俺に礼を言つと女の子と共にその姿を焼き消していった。信じられないものを見た俺は

暫くその場で呆然としていたが我に返り、急いで家に帰つた。そして見た事全て話したが、誰も信じてはくれない。

夢を見たんじやないか… そんな事を言つ大人達。心配するどころか、逆に怒られてしまつた。

増水した川に近づくなんて そう言つて、誰も相手をしてくれなかつたけど、あの人だけは俺の話を真剣に聞いてくれた。それだけ俺は嬉しかつたが、馬鹿だつたのか… もう一度、龍に会えればみんなに信じてもらえる。

そう考えて俺は川に行つたんだ。

『さて… 人の子よ。我は魂を運ぶ者… お前に会いたがつておる魂があるので、特例で連れてまいつた』

何を言つてゐるのか、最初は分からなかつた。しかしその言葉を発した龍は静かに瞳を閉じていく。

俺に会いたがつてゐる魂…。俺の知つてゐる人で死んだ人なんて、何人もいる。しかし、俺に会いたがつてゐるかどうかは分からぬ。一人だけ思い当たるのは その考えが俺の胸を抉つていく。

「久しぶりだね… 直人君」

ほんやりと宙に突然現れた姿。薄く透けるよつた姿は… 優しい微笑みを浮かべていた。

それは子供の頃、よく見てゐた微笑だつた。その影のよつた姿がゆつくりと俺のそばまでやつてくる。

次第にはつくりと輪郭を成していく姿は、見間違う事なきあの人だつた。

「 ゆう … こ … ねえちや … … ん? 」

「 うん … 何年ぶりかな 」

「 ツコリと微笑んでいる裕子さん。懐かしそうに俺を見ている姿は当時のままだ … 顔も髪型も 服装までも。 」

あの日のままの姿。俺を助けてくれた時のままの姿がそこにあった。「大きくなつたね … あの時は、7歳だったかな」

「 えつ … あ、うん … 」

「 あれから9年 … もうすぐ、10年だね 」

そう … あの日からもう10年が経とうとしている。今年で10年目

… それだけの年数が経つたのに、未だに俺の心は

あの日の出来事を後悔している。俺が馬鹿な事をしなければ … 裕子

姉ちゃんは

「 裕子姉ちゃんつーお、俺 」

「 いいのよ … 直人君。あなたは何も悪くないのよ 」

「 でもつ ! 俺のせいで、裕子姉ちゃんは 」

「 いいの … 」

ゆつくりと首を振つて俺を見つめている裕子姉ちゃん。なんで、そんな笑顔で俺を見る事が出来るんだよつ !

俺があなたを死なせてしまったのに

俺があの時、あんな事をしなければ裕子姉ちゃんは死ぬ事はなかつたんだ。俺のせいで死んでしまつたのに … 。

足を取られて、川に落ちた俺を助ける為に … 裕子姉ちゃんは川に飛び込んだ。そして助かつたのは俺だけ … 。

なんで、そんな笑顔で俺を見ていられるんだ ! 俺の事、恨んでないのか ! なんで … なんで … 。

どうしていつまでも、そんなに優しくしてくれるんだよ … どうして … 。

「 私はね … 直人君。あなたを助けた事を誇りにおもつているわ 」

「あつ」…さん

俯き面を瞼でいる俺の頭の上を、優しく透き通る声が通り抜けていく。

ゆづくと頭を上げて、裕子さんを見てみるとその瞳は優しくに満ちていた。

「いつまでも、自分自身を責めないで…直人君

「でも…俺の

「それ以上言うと…お姉ちゃん怒ります」

その声に俺はビクッとしてしまった。ちょっとおどけたような声…

その言い方は裕子さん独特のもの。

俺がいたずらしたりすると、腰元手を出してやつけてきたんだ。

「ほんとに直人君は昔から変わらないね。優しく…本当に優しい子だね」

スッと差し出された腕が俺を包んでいく。裕子さんが俺を抱き締めて…そう感じるのに少し時間がかかった。

目の前にある裕子さんの顔。昔は見上げていたはずの顔が今は目の前にある。

それだけ時が過ぎて、俺が成長したといつ…そして、それだけの時間が経つたということ。

「直人君…もういいんだよ。私はあなたの事を恨んでなんかいないから

「裕子さん…」

背中を擦りながらと囁くように俺に言つ裕子さん。その言葉を待つていたかのように俺の耳から

何かが零れてきた。次々と零れていく…雨とは違つ。俺の中から流れ出る感情の雨 涙。

「あ…う…さん…」…めん。」めん…な…さん

堰を切つたように流れ出した涙が、俺の顔を濡らしていく。今まで  
言いたくて…言いたくて堪らなかつた言葉。

そして、聞きたかつた言葉…その一つが叶い、俺の中で何かが弾けていた。

「ごめんなさい…ごめん…な…さい」

「いいのよ…直人君。泣き虫なところも変わつてないみたいだね」  
背中を擦つてている手がゆつくりと動いていく。俺の中でゆつくりと溶けていく蟠りの気持ち。

許されるはずのない罪を…許された。俺の大好きな人によつて…その人によつて俺は救われようとしている。

『そろそろ…時間じやぞ』

後ろから聞こえる声が俺を現実に戻していく。その声に反応するようゆつくりと離れていく腕の感触。

「時間みたい…もう行かなきゃ……」

「えつ…？」

「さよならだね…直人君」

「いやだつ！まだ、行かないでっ」

困つた顔をした裕子姉ちゃんは、俺の目を見ながらゆつくりと頭を振つていた。それは拒絶ではなく…別れ。

「…空の上からいつも、直人君の事見てるから」

「ねえ…ちゃん…」

少し悲しそうな声が返つてきた。その瞳には、薄つすらと涙が溜まつていて。

いつまでも変わらない人…その心も昔のまま…。いつでも優しい俺の大好きな人…。

「あなたの心を解き放ててよかつた…いつまでも私の事で、辛い思いはさせたくなかつたから」

「裕子……ねえ……ちやん」

「直人君……もう悲しまないで」

「うん……」

もう一度、俺をシッカリと抱き締めてから、微笑んで離れて行く裕子さん。

ゆっくりと龍の近くまで歩み寄り、こちらを振り返ると

「元氣でねつ 直人君」

そう言つと、龍と共に姿がぼやけて強き湧かれるように、空に溶け込んでいった。

白く霞んでいた風景が次第に晴れていき、辺りが鮮明になつてくる。俺はただその場で消えた裕子さんの姿だけを思い出すように見つめていた。今のは夢なのか……でも、そうではないと教えてくれるものがある。

頬を伝つもの それが夢ではなく現実だと教えてくれていた。

「ありがとう……俺、あなたの分まで生きます。そして……」

空に向かい消えていく声は、あの人には届いたどうか……。 いつの間にか降り止んでいた雨。見上げれば、空は未だ分厚い雲に覆われている。

しかし、少しずつ雲は晴れしていく。雨は続く事はないのだから……いつかは晴れる日が来るのだから。 今の俺の心のよう……。

「また……いつか会いましょう」

雲の隙間 空から一筋の光が差し込んでくる。

これは… あの人からの返事だろうか。光は温かく、まるであの人があんぐくれているような感じがする。

また、瞳から涙が零れ落ちてきた。いつまでも、俺はあの人助けられてばかりだ…。

光を追つて、空を見上げて

いつまでも涙は枯れる事なく、流れ続けていた…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6567a/>

---

雨は優しくも辛い記憶を呼び覚ます

2010年10月11日02時06分発行